ものまね関係

令和３年度和歌山県文化振興事業補助事業
「コミュニケーションからアートを考える」
体験アート・ワークショップと成果展示　活動報告書

本事業は和歌山県立近代美術館「コミュニケーションの部屋」展の関連事業「アーティスト・トーク＆ワークショップ」として実施しました。(9 月 18 日・19 日より延期して実施)

◆アーティスト・トーク
2021 年 10 月 9 日（土）　14:00 〜 16:00
◆ワークショップ
2021 年 10 月 10 日（日）　13:00 〜 15:30
会場：和歌山県立近代美術館
主催：特定非営利活動法人和歌山芸術文化支援協会（wacss）
後援：和歌山県教育委員会、ニュース和歌山株式会社
協力：和歌山県立近代美術館

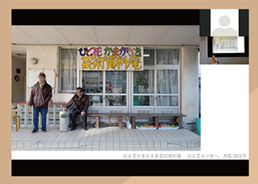
編集：前川紘士、青木加苗（和歌山県立近代美術館）
デザイン：スタジオ 32000km
発行日：2021 年 11 月 30 日
発行者：特定非営利活動法人和歌山芸術文化支援協会（wacss）

アーティスト・トーク
2021年　10/9(土)
ワークショップ
2021年　10/10(日)
講師：　前川 紘士

美術の世界で「ものまね」と言うと、ちょっと聞こえが悪いかもしれません。オリジナリティを求められることがあたりまえの世界では、複製やコピーは、にせものを意味するからです。けれどもよく観察して写し取る行為は、本来、創造の出発点でもあります。
さらに今回のワークショップは、ただの「ものまね」ではなく、「ものまね " 関係 "」と題しています。まねる側とまねられる側の両方に立つこと、またその状況を客観的に見る行為は、オリジナルとコピーの単純な二項対立ではなく、あらゆるところに創造の種があると気づかせてくれます。しかしその「種」は、誰かひとりがすばらしいオリジナリティをもっていたとしても、決して芽吹くことはありません。共に見たり話したり、他者とのかかわりあいのなかに生じる「すき間」や「ずれ」といったはざまの部分に、芽吹いてくるように思います。そこにこそ、私たちが目を向けるべきコミュニケーションの可能性があるでしょう。
「コミュニケーションの部屋」展の関連事業と位置づけた本事業は、展覧会で投げかけたテーマを実証する機会ともなりました。

和歌山県立近代美術館学芸員　青木加苗

アーティスト・トーク



［上］アーティスト・トークの様子（右：前川紘士　左：青木加苗（進行））
［中］会場での実施とオンライン配信を併用した。画面は展覧会出品作のひとつ《風景に同期する》(2011 年)
［下］トークでは、前川のこれまでの活動を広く紹介した。スライドは「ひと花かまがさき芸術資料庵」の活動より

新型コロナウイルス感染拡大により延期されたのち、展覧会の最後の週末に開催されたアーティスト・トークは、対面とオンライン配信とのハイブリッド形式で行いました。

トーク内容は、私が自由に設定して構わないとのことだったので、事前の打ち合わせを元にスライドを用いて、以下の４つの内容を準備しました。

1. これまでの作品や活動の簡単な紹介
2. 「コミュニケーションの部屋」展に出品している那須大輔氏との一連の協働制作《D50の時間》と、その起点となった10年前の「アートリンク・プロジェクト」*1 について
3. 大阪市西成区で前川が美術作家として関わる「ひと花プロジェクト」*2 について
4. 上記に関連して現在断続的に行なっている研究会

2 と 3 の内容は、今回の展覧会と直接関わりのある内容として位置づけ、その前提としての 1 と、近年の関心事項として 4 を位置づけました。その内容は動画記録として美術館ウェブサイトに公開予定です。

結果的に、予定時間の 2 時間近くを使って、これら４つ全てについて話したため、今回はトークの現場を、来場者との対話の場とすることは出来ませんでした。しかし今後の対話の起点となる事例とその拡がりについて、一旦まな板に載せることが出来たのではないかと思っています。

2011年度の「アートリンク・プロジェクト」における協働制作《D50の時間》については、開始までの経緯や制作の過程を多めに紹介しました。20回近く行なった制作の過程に関して、細部の全てを拾い上げることは勿論出来ないのですが、当時のやりとりの「手触り」の部分を出来るだけ伝えるため、この10年間で失われた作品など、記録でしか紹介出来ないものについては可能な範囲で見せるようにしました。

その後、《D50の時間》の 2011年度以降の展開、2017年の再展示の機会と作品紛失の判明、制作の更新といった話と共に、後半の「ひと花プロジェクト」の事例紹介に繋がる、2012年のレジデンスでの経験や、2013年以降により意識するようになった、生活の場と芸術活動の関係やあり方への関心について紹介しました。

大阪市西成区の「ひと花プロジェクト」の活動やその中で作られた作品は、壁画とスケッチ、「記憶の絵」の 3 つに分けて紹介しました。具体的な絵の紹介では、様々な地域の記憶を人とその絵が運び伝える例の一端を示せたのではないかと思います。その後、作品群の取り扱いについて考える「ひと花かまがさき芸術資料庵」や、他の作品群や価値との関係を見直す「釜ヶ崎の表現と世間をめぐる研究会」、「作品群 (=) 資料群」といった継続している活動までを一通り紹介しました。

当日、対話に充分な時間を取れなかったとはいえ、学芸員の青木さんとのやり取りでいくつかの点については触れることが出来ました。特に、トーク当日の言葉で言うと「娑婆」(美術館の外や生活の場) での諸活動と「美術館」での活動の関係について、単純な対立項としてのみ捉えるのではない可能性については、これを機に引き続き考えてみたいと思いました。

また、今回のトークの中では言及しきれませんでしたが、展覧会準備・開催期間中の美術館やwacssとのやりとりを経て、改めて意識するようになった事柄は沢山ありました。福祉や表現と市民活動との関係、様々な活動やコレクションによる人々の参加やその持続性、諸活動の独立性、コミュニケーションの前提になる構造、社会教育等々、個別に挙げだすとキリがありませんが、今後の活動の中で何らかのかたちで考え、触れて行ければ、と思っています。

前川紘士

*1 アートリンク・プロジェクト
福祉施設を利用する障害のある表現者と外部の作家とのペアで、一定期間協働制作を行うプロジェクト。ここでは 2011 年度に開催された「奈良県障害者芸術祭 HAPPY SPOT NARA 2011-2012」の中で行われた前川と那須大輔との協働制作を指す。前川と那須は一連の協働制作の成果を、2012 年 2 月奈良県文化会館にて《D50の時間》として過程の記録と共に展示した。

*2 ひと花プロジェクト
正式名称「西成区単身高齢生活保護受給者の社会的つながりづくり事業」の愛称。事業主管は大阪市西成区保健福祉課。事業に登録した対象者に、社会参加、生活支援に関する各種プログラムを提供する。外部講師を招いた表現プログラムがひとつの特徴。前川は 2013 年 9 月より「美術の時間」というプログラムの講師として関わる。

ワークショップ前半：風景のものまね

新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催を延期した日程は、展覧会の最終日。幸い、天候にも恵まれ、秋晴れの気持ちいい１日となりました。
受付開始時刻の12時半を過ぎると、会場には参加者がぞくぞくとやってきました。各自、「も」「の」「ま」「ね」とグループ名が記された缶バッジを受け取り、主会場の美術館ホールに入りました。

説明

最初に、wacss 代表の井上、展覧会担当の青木学芸員が企画のテーマと講師の紹介を行い、続いて講師の前川から、自己紹介とワークショップの流れを説明しました。

《ぶどう》《ぶどうの思い出》の載ったワークショップとトークのチラシ

今回のワークショップは前後半に分けた 2 本立てで、その活動内容は「コミュニケーションの部屋」展出品作である《D50の時間》をヒントにしています。《D50の時間》とは、2011年に奈良県障害者芸術祭「HAPPY SPOT NARA 2011–2012」を機に、前川が那須大輔とペアになって取り組んださまざまな協働制作の総称です。木や粘土を使って立体作品を作ったり、絵を描いたりと、いろいろな方法を試みた一連の作品の中から、映像作品として完成した《風景に同期する》(2011) と、色画用紙を用いた制作から生まれた那須の《ぶどう》(2011) と前川がそれを模造した《ぶどうの思い出》(2021) を手がかりとすることを伝えました。

概要説明が終わると、前川と青木が突然黙って、なにやらごそごそと動き出します。参加者は、2 人が一体何をしているのか、不思議そうに見ています。実は２人はそれぞれ、会場内の誰かの動きを「ものまね」していました。まねされている人は途中で気がついたようですが、人の動きがリンクすることで、見る / 見られることの意識や、奇妙なシンクロの感覚が生まれました。

散策

方法がわかったところで、４人組の４グループで美術館の内外を散策します。館内のカフェのなかにいる人の動きを遠くから眺めて模倣したり、受付に座るスタッフの作業をまねしたりするグループもありました。建物の外を歩き回り、ガラス越しに見える館内の別グループやスタッフの動きを観察してまねるグループも。次第に美術館の前を通る車や敷地に置かれた三角コーン、建物に留まった鳩、和歌山城のものまねまで生まれました。

風景のものまね

ものまねの様子は、各グループのサポートスタッフが動画で記録しました。この動画は、ワークショップの最後に、みんなで共有することとしました。

ワークショップ後半：かたちのものまね

後半の説明

「風景のものまね」を終え、ホールに戻って少し休憩をとったあと、後半の説明が始まります。美術館内や周辺を歩き回り、大人たちは少しバテた様子でしたが、若い参加者たちはまだまだ元気です。

導入

後半は、最初から会場に置かれていた色画用紙を使った紙工作のワークショップです。普段見る紙よりもかなり大きなロール状の紙を、どう「ものまね」に使うのでしょうか。

今回も導入として、前川と青木がデモンストレーションをします。行うのは、大きな紙を使って自由にかたちを作る作業。与えられた時間は1分間。カウントダウンで時間終了となったところで、できあがったのはくしゃくしゃな謎のかたち。何かはわかりませんが、「1分彫刻」ができました。

1分彫刻

まずは作ってみて、それから何に見えるか考える。これからやることがなんとなくイメージできたところで、参加者も早速実践です。今回は全部で3セット行います。

1セット目は白い紙を使って、「1分彫刻」を試みます。自分の身体よりも大きな紙と格闘しながら、大胆にかたちを作っていきます。1分間はみんな短いと感じているようでしたが、同じ時間と同じ材料で、全く違うかたちが16個できあがりました。

完成したところで、各自でじっくり見てみます。

5分彫刻

身体が慣れたところで2セット目です。
前半の「風景のものまね」を一緒に行った 4 人のグループを、2 人 1 組のペアに分けます。4 グループ 16 人の参加者で 8 ペアが出来ました。
先ほどはひとりで「1分彫刻」に取組みましたが、今度は2人で協力して「5分彫刻」を作ってみます。今度の材料は、カラフルな色画用紙と、それぞれのグループごとに異なる色のガムテープです。

何を作るか、ペアで相談しながら、とにかく5分以内に何かを作ります。進め方もかたちもいろいろ。

できあがったら題名を紙に記します。相手ペアに見えないよう封筒に入れて、スタッフに預けます。

15分彫刻

3セット目。
同じグループの相手ペアと、互いの「5分彫刻」を交換し、いよいよ「ものまね」です。即興的に、かなり自由かつ大胆に作られた「5分彫刻」を模倣するのは、結構難しそうです。じっくり見て、ペアで協力しながら、全く同じ材料でものまねできるでしょうか。制限時間は今度は15分。先ほどの3倍。時間はたっぷりあるのか、足りないのか！

完成した作品には、先ほどと同様に、それぞれが題名をつけました。

作品

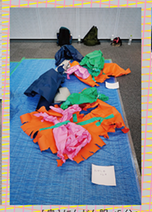
できあがった作品は、11 月 13 日より和歌山県立近代美術館のウェブサイトで公開しました。
https://www.momaw.jp/event/2021monomane_ws_exhibition/

グループ「も」の動画

［奥］カラフルアイスクリーム <5 分>
／［手前］タイムマシーンにのってる人 <15 分>

［右］はな（花）<5 分>
／［左］赤と青のふしぎな生き物 <15 分>

［奥］たき火 <5 分>
／［手前］キャンプファイア <15 分>



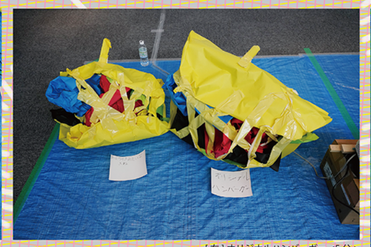
［奥］にんじん服 <5 分>
／［手前］おかしのドレス <15 分>

グループ「ま」の動画

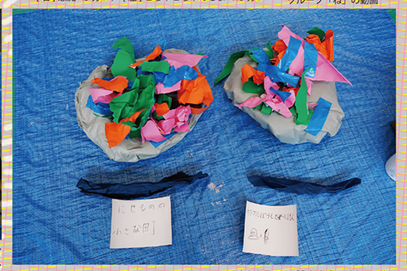
［右］悪魔 <5 分>／［左］ごちゃごちゃのしま <15 分>

グループ「ね」の動画

［左］とうの前にいるつる <5 分>／［右］人形のしろ <15 分>



［右］オリジナルハンバーガー <5 分>
／［左］オムライスみたいなふね <15 分>



［右］カラフルぼうしと青いけん <5 分>
／［左］にせものの小さな町 <15 分>

グループ「の」の動画

紹介

最後はみんなで「ものまね」を鑑賞しましょう。
余った材料や道具を片付け、それぞれのグループごとに、題名と一緒に「展示」します。壁面には前半の「風景のものまね」の映像を投影し、それぞれのグループの「ものまね」の成果を、一望できるようにしました。

準備ができたら、「も」「の」「ま」「ね」のグループ順に、自分たちの行ったことと作ったものを紹介していきました。

“ものまね”って何だろう？ 少し不安だったワークショップ。いつもそうだが、想定外のものが生まれる予感はしていた。始まってすぐ、その予感は現実となった。目の前で繰り広げられる“ものまね”関係。見たものをまねる、作った物をまねる。瞬間的に体を動かし、よく観察して考える。柔らかい頭、素直な観察力が動き出す。これまでにない不思議で楽しいワークショップとなりました。講師の前川さん、学芸員の青木さんはじめ、この企画に関わってくださった皆さまありがとうございました。

NPO 法人和歌山芸術文化支援協会
理事長　井上節子